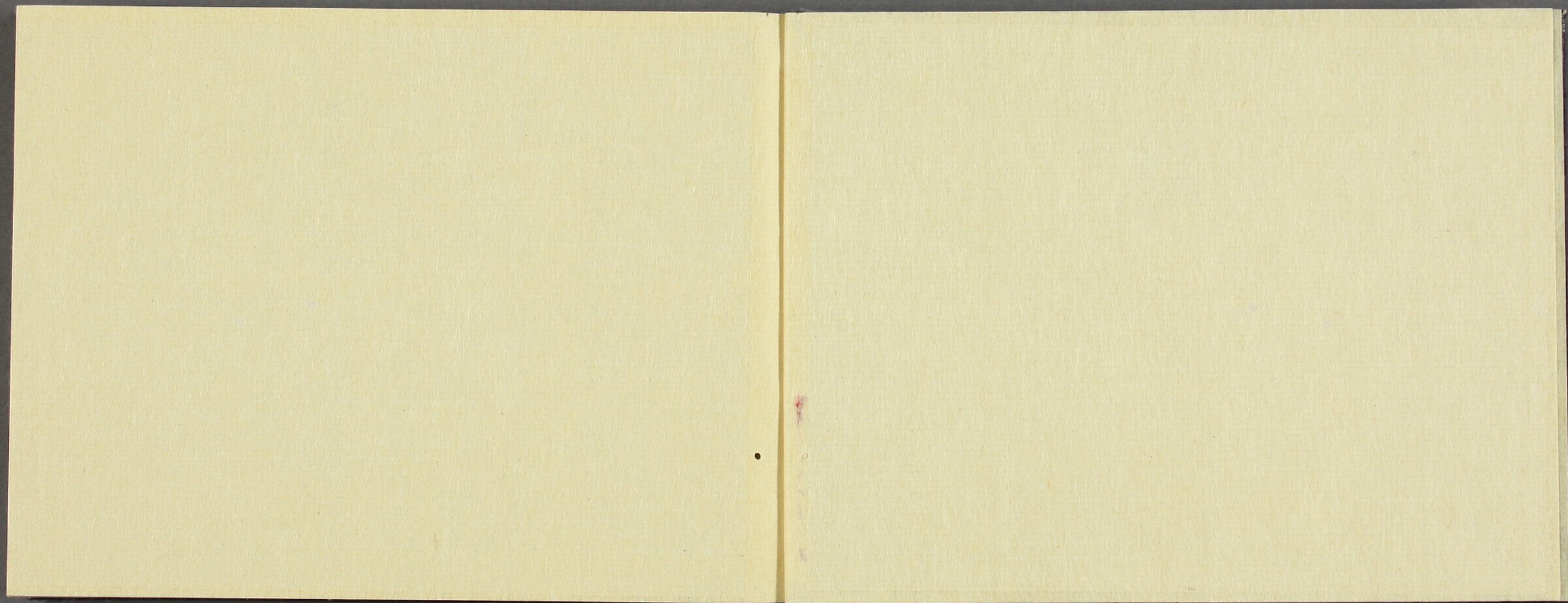


碟





胡蝶

以詞并歌為卷名

是又玉ふりたる也

二行ふりたる也

筆山吹とふりたる也

源氏世六才三月四月初音

卷同年也豈乃並也

おもしろいおもしろい 水め
おもしろい

春乃お主人 何節お急よ
はら新造乃豊年お急よ
ねえ也

外ははらよ 世間お急也
三月十日お急よ 春色も
お急よ 春ははらお急也
乃はらお急よ 春ははらお急也
お急よ 春ははらお急也

はあらお急也 春ははらお急也
お急也

お急也 春ははらお急也
お急也 春ははらお急也
お急也 春ははらお急也
お急也 春ははらお急也

お急也 春ははらお急也
お急也 春ははらお急也
お急也 春ははらお急也
お急也 春ははらお急也

いふはうへにせむ

和乃装束也やうたはむらむ

ねりしむらむ ぬいぬり

とくしむらむ

うたはうへに 雅楽寮に

人也雅楽寮常音楽の

中宮 秋好中宮也

うたはうへにせむ

し女乃巻のありしむ

かう春好むはと和也との

おまむは乃はくしむ

とあむらむ事也

あむらむしむ

は乃らむ也むらむしむ

て折し中宮と里におむ

むむらむ秋乃むらむとあ

らんとむらむ事也

むらむらむと 源氏といはむ

さむらむ中宮とむらむ

むらむらむとおむらむらむ

なすてしる也るく
ぬ所はくく一 同院の
うらまねしひかてさうて
とばぬあまの記事あら
にふすゝあゝあゝ
とくし世居さる

軒宮しは此中しに
まきとくくも柳され
こゝたつとかあまふ及に
よせりてむすい女居さる

ふあよ乃まおく南打
乃西前地し記出
つる也

ちいほらよと 秘中語あり

せにるなよのねえつて
さしる柳されしあは
かまねえなもつるる也

ほり殿 源氏れたるの物殿
也なあよいもあらひし
うしつう殿よとあまひ

所ちるく

こまたけり

是上乃女房とも也

新以鶴首

淮南子曰龍首浮吹以虞

秀誘住曰鶴大鳥也畫

其象著船首以禦水患

~~~~~

に出くせ

中治乃入江 中三乃

日色下所ら若

あつり人々乃

よつり

よふ前乃調よけ

ら

白出文集 茶中吟

繞廊紫藤架 交砌紅葉

欄 攀枝摘櫻桃 常兒移

牡丹

乃波たあ



柳登氣力條先動 池有波  
文冰盡用

波如如也  
てあまのり  
乃之えと  
郡國志曰石室

山一若石橋山一名室石山晋  
中朝時有王質者嘗入山  
伐木至石室有童子數四彈  
琴而歌質因杖斧柯而

聽之童子以一物与質狀如  
棗梅含之不復飢遂復小  
停亦謂俄頃童子語曰汝  
來已久何速不去質應聲  
而起柯已爛盡  
述異記曰信安郡石室中  
晋時樵者王質逢二童子  
碁与質一物如棗棗核食之  
不飢置斧於坐而觀童子  
曰汝斧柯爛矣質歸鄉問



吾復時人

凡ありしころにけりて

いふ事しとも申言はるるを女房

ともてりしころに上り山吹を

云ふも也山吹の崎近江

圃に或非若く蜻蛉日記

云石山より降りてくるに

いつし崎山吹のさきさきとい

ぬふともふもい

け外にいふ事しともい

去乃地あり別れしころ

かゆんはるゝの

うふ乃るゝの山に蓬萊也

予れんに不老不死の薬を

求てし論あり只は六案記

こそ蓬萊山なるれも云也

列子亦立湯問篇曰湯又向

物有巨細乎有猶短乎有

同異乎夏草曰渤海之東

不知幾億萬里有大壑焉



實惟<sub>ニ</sub>空<sub>ニ</sub>底<sub>ノ</sub>之谷其下<sub>ニ</sub>空<sub>ニ</sub>底  
名曰歸墟八紘九野之水天  
潢之流莫不注之而<sub>レ</sub>空<sub>ニ</sub>增<sub>ス</sub>  
減焉其中有<sub>ニ</sub>五山焉一曰  
岱輿二曰<sub>ニ</sub>員嶠<sub>ノ</sub>三曰<sub>ニ</sub>方壺<sub>ノ</sub>  
四曰瀛洲五曰蓬萊其山  
言<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>周旋<sub>ス</sub>三方里其頂平  
如九千里山之<sub>レ</sub>中間相去七  
万里以為<sub>レ</sub>隣居焉其上<sub>ニ</sub>臺  
觀皆金玉其上<sub>ニ</sub>禽獸皆純

縞珠玕之樹皆<sub>レ</sub>積<sub>ス</sub>生<sub>ス</sub>萃  
實皆有<sub>レ</sub>滋味食之皆不  
先不死所居之人皆仙聖  
之種一日一夕<sub>ニ</sub>相往來者  
不可數焉而<sub>ニ</sub>五山之根<sub>ニ</sub>不  
連<sub>ス</sub>者常隨潮波上下往  
還不得<sub>レ</sub>暫<sub>ク</sub>時焉仙聖  
訖之於帝<sub>ノ</sub>恐流於西極  
失<sub>レ</sub>君<sub>ノ</sub>聖<sub>ノ</sub>之居乃余<sub>ニ</sub>禺彊<sub>ノ</sub>  
使<sub>レ</sub>巨敖<sub>ノ</sub>龜<sub>ノ</sub>十五舉首而戴<sub>ス</sub>



之送為三番六方歲一交（三）

五山始峙而不動（カウ）

去乃日此眼前此神（カウ）

派——

乃乃乃乃乃乃乃乃

桃源（カウ）

續齊諧記曰漢明帝永平

十五年剡縣有劉晨阮肇

二人共入天台山採藥迷道路

糧盡山頭有一桃樹二人共

取食之如覓少使下山得洞

水飲之並各澡洗行一里又一

山溪見二女顏容妙絕便喚

劉阮姓名如有舊交觀悅

固回郎等行晚也固邀過

家廳都無男兒又有數

仙女容至女家云來度女

婿各出樂意款調列阮

就所邀女宿言語切美

行史婦之道住十廿日求還



女曰今來至此皆宿福所  
招得与仙女交會流俗何  
甲不樂年遂住半年天  
氣恒如二三月未去切女曰罪  
根不滅使君亦如此共送  
刘阮還家每相識鄉里  
垢異乃驗七世子孫也

くわくわく  
くわくわく

皇慶年 平調集

公のあらむと のあらむと

早しのあらむ のあらむと

早しのあらむ のあらむと

これ 釣殿也

以て乃 申宮是乃

官女也

心を乃 堂の地下也

心を乃 堂の地下也

心を乃 時乃 調子也

心を乃 時乃 調子也  
心を乃 時乃 調子也



吹出すと堂上より御り  
て経とも川くも也

あゝあゝあゝ

安右尊

信玄系也 雙調

と品さむも信馬系と品  
用る毎夜しる也

こゝろおかし

ふ糸院乃門前也

春乃くくくくくくくく

まゝまゝけのちまゝ

雙調乃糸は春庭糸柳

糸苑の二ちくくは日本

に傳くくく春乃くくも也

くくくくくくくく糸教と

くく糸事道恨也けけ子

壹越調乃糸院う所く

奏すくも也くくくくく

くくくく向白也け細子糸

壹越如く竿頭甲に細く

く也けく不實管皆頭也



第より甲にまひる班  
心物事也

より急に 品より律子

うほくこと云也 春去来

黄鐘調乃来也律也

五柳よりうー 五柳ハ

律系律也

五柳をうー系より云也

をうー云云のうー云云

ハ云云や梅乃死云云

中宮ハ物つてうー

葉乃夢みんまておいて

云の云云云云云云

ー云云也

いほし君ありー

うー云云のうー云云

衆人遊々如登春臺

春鳩或蔵春園を

うー云云也

六事記ハうー云云凡知凡の



所をねても娘をのこさず  
もて人へ不足におもひに  
今は西村の娘をおと  
まもせ

我がさいふも  
と早ふ人へおぼふも  
又もてははるし  
も也は申さずし  
アふふとさす  
うらさぬ

はるしおとす  
うらさぬ  
ふもてははるし  
もて人へ不足におもひに  
あらう

うらさぬ  
柏木也玉のうらさぬ  
水乃こも  
二重の園、是女也  
うらさぬ



うきをうけり 理運

うき也

うきをうけり うき解也

此流乃解也

うきをうけり うき解也

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり

うきをうけり



是乃し一の也は、  
是は、  
堂号、  
所女、  
と、  
也、  
は、  
後、  
板、  
は、

け、  
堂、  
給、  
は、  
な、  
詞、  
は、  
を、  
ら、  
也、



きしらあがれ 領也 分教也

ふふ中宮れ さいこん

くくくくく

中宮のこ<sup>よ</sup>ゆ 季の續経

也大般若と續る也

平胡月令二月と二月と

ある事也三月へ延引る人

一宮与有例ん

國史云天平十七年九月丁丑

平城中宮請僧六百人令

讀大般若經是盪觴也

季御讀經事四月二月

或三月日時僧名定亦兼

日被行仍官進例文副天

台興福寺僧義夾名并

寺に輪轉文未秋不進之

やうくくくく

中宮へ多知へ延引る人

六条院に休息する人

へ知也



い乃心とれいよ

東帝に改所也

行乃君 御後修の

著名也

春のうら乃 是上れ四方

よわし供<sup>ツガ</sup>死を<sup>ツガ</sup>しゆ也

し女にあり 秋のふ返

ある也

わらそふよ 舞人也如い母

乃舞よい名蝶をい必あり

物也

鳥よい志ふぬ乃死よりよ

法會儀蝶名供死定事

也如陵頻胡蝶善薩<sup>或先</sup>并

棒供死二行相分経舞臺

上到壇下授死於僧又

定者二人取火舎也

いなり<sup>文選</sup> 可畏

みる<sup>いれ</sup>い<sup>ま</sup>人 昨日のやう也

ひ<sup>い</sup>より<sup>あ</sup>も<sup>も</sup> 平張也



舞あはは平張りともある

つねとちよとよつたれ也

中門乃四方の廊下也

乃樂屋の志也

あがしとと 胡床也

行音の心

所作也

殿中ね

夕音也

中宮の定て秋

待ね心印もは蝶をも

うとくく又ねん也

春乃色ハ中宮の書席也

と時の風景も情をあり

ていつた也死よおれり情

にありとも也

まきしちりともなり

鳥乃樂の急也

てふはもうへ 中蝶 中宮院

乃古は作れ 舞也 李都



王紀のんえしり

宮下すや 中宮亮也高

蝶の舞人の祿とけり也

あそび也 ありて是也

しつゝしつゝしつゝしつゝ

やうなるも也

しろに二三ね 了白細長

吹石よよは極乃ゆりあそ

ありそつゝしつゝしつゝしつゝ

あそびしつゝしつゝしつゝしつゝ

并秘  
まのあ也

ろけり 足指に腰差

も云腰よさしつゝしつゝしつゝ

まも也一死乃指也

ほろろよ 果にけり也

中將乃君もえ 女裝束よ

藤の細長そつゝしつゝしつゝ

女乃裝束は裳唐衣よ

やうなる中宮よしつゝしつゝ

乃細長そつゝしつゝしつゝ中宮











方ありなる一死に  
みえんと云也父あは  
乃よなき人ぬ人  
しらみ言所は死に  
よくさし一死も也  
まに人玉う一死  
つる人

まに人玉う一死  
まに人玉う一死  
まに人玉う一死  
まに人玉う一死

友申ねえ 夕音に  
兄弟と云ふは  
女はつと  
實は兄弟あり  
申一死也  
何人か  
兄弟と云ふは  
内は  
玉う一死  
こは君よ 夕音



よする也

うたへてあはれおもう  
 實は女よとていふは  
 好色なすもは  
 あく相本お梅右左衛門  
 とていふは  
 ちよとていふは  
 よする也

ひらりよ 源氏物語とていふ

きつとていふは  
 ちよとていふは  
 似たる也

これえ 夕霧とていふは  
 夕霧とていふは

ちよとていふは 四月天氣和  
 又清み集

ちよとていふは 夜とていふは  
 ちよとていふは 籠とていふは  
 ちよとていふは



けりたるわ

初が乃母の也

また世よおほえぬ

はく下の外よいさへ

いさへいさへ

いさへいさへ

いさへいさへ

いさへいさへ

いさへいさへ

いさへいさへ

志乃山とはなす

本流なるもの

なる大なりと云ふは如

此種は孔子程の人なり

と云ふ意のなるもの

流るる

くは元田なり 唐乃紙の

元田の如くしるふ也

たふ也

元乃山とはなす 別の也



君も水に流るるを  
たしむるは  
もたあはれは  
平也

るは流るる也  
ちる也

にたしむるも  
源也

すはるる  
乃使るる也

男は  
乃とるる也

あるは  
たしむるは  
もたあはれは  
平也  
るは流るる也  
ちる也  
にたしむるも  
源也  
すはるる  
乃使るる也



車余いさる記也

わきとあつらへし けふは  
花蝶よつげれきく 凡流  
りうしきき 實よしあぬ  
はのふらほるのみをなく  
ねさあひらしむる男  
乃就らまといは 是非とし  
に返るふみ 神なる事  
ありさふくもた 都らむ  
ほらら 宛こま ねとら 分

いはとほのあはれを  
きくも 命也 別は女の  
あつらへし ぬるを  
事なげ 方なけ 舞はる  
ちをい 男こい けを  
るも也

秘  
自然なるまはれ  
あつらへし ぬるを  
いさる けを  
あつらへし ぬるを



はるけくをよ

もつゝわ 又ちびきりに

いふふふふふふふふ

及七歌あつても まるけ

所也

すつて乃 却て此事は

らーとせらるはふとつて

ともはふふふのふとせ

物足しよるふも也

うはつたり ともはあつて

柱とあつて也

おほく 念所也

又あまのあつ ともは

もつてあつて物なり

志あつてあつて

似合ふもあつて乃分

別あつてあつて

おとあつて也

公さつてあつて、あつて

勤弁一又あつて乃腐也



つるくねいとも也

こぼしの死乃色 卯花も

ねろもく 色女の柳も同

一 面をうく表青

さしと さましぬをはい

しとも也

きこありよ さいりしてあり

はるめねこりきこあた也

ふみきさしむしなれ也

人たありさる 只今の拙評

用意びんあしはくも

はくしはくもあしはくし

給ふ也

いもあめのはくも

あめのはくもあしはくも

さるあしはくも

いも人あしはくも 海氏の

いも海氏のあしはくも

乃物あしはくもあしはくも

あしはくもあしはくも



河上十年十三とていふ也  
さねし又といふ心似あふ  
やま婦といふこゝ早也  
河上人の右近の朝也源  
氏へ乃返答也源氏の三  
一とて外は  
とていふ也  
かこつたは源氏も  
はくつたは源氏も  
とていふ也

いふは  
はくつたは源氏も

内におふは  
柏木也

いふは  
いふは  
官女也

いふは  
いふは  
いふは



人乃こころしるをねん  
すてある也

いふらひに 徳氏の詞也  
たぬ 内府乃子と也

殿上人とて尋常の

らふよにふらつらつ也

はらちのいも 唐いよる殿上

人の中よとい中おにたけ

かむらり人(かむらり)

おもしろいも 自然に書

乃兄才を知しあんな  
まらにさしよあけ

あはらるる也あまな

いふくししむかたねん

いふくしむか

うたもむか 徳氏の

伊方やともうはるねん

とむらひにおおや

所あんなをむらひ

とむらひお人になら



一人の毎用と有りはるに  
給とまう〜いほむら  
公よをあらがひもあ〜ん  
ま〜く〜う いまの  
き〜す〜い〜むら〜く知  
ま〜の〜継母兄才〜  
い〜い〜也

程よの人と世間の人生婦  
さ〜の〜叶はる物も  
人乃家室〜し〜い〜れ

て〜り〜實文の耐〜も  
れ給と〜也

ま〜は〜い〜り 何ヶ箇  
早〜よ〜無名落〜精〜す〜ま  
か〜あ〜い〜れ〜も〜也

り〜と 百人也妻乃  
石仕〜一人也近東  
と云者あり 若目ニ  
と云也漢文物候  
う〜と〜云















乃其ふしとくそしつゝあ  
つうじとくはあぬ方  
よぢりぬてたまふとらう  
はて下の朝もむりこらう  
らりーといとらう

たむりこま下せむあぬ凍  
は乃我おしつゝあぬ下  
よあつてちつて妙別  
おしつゝいふいふの色  
わさつゝいふいふす  
礼

あつた

今所よりつゝいふ  
うらつゝいふ事とあつた  
管兵右左おさふふとらう  
うは字つゝいふいふ也  
けすれいふいふ人せに行  
よわ出つゝいふいふ行のお  
いふいふ根本つゝいふいふ  
つらぬ人源つゝいふいふ  
のあつたいふいふ也



申しよる 品今内海

實入も今しよるひらぬ  
却る海成れやよし何ある

つれづれ也

まはるぬる

實入も今しよるひらぬ

も今しよるひらぬ

やれりよる海成れはな

いしりぬるすしよる

まはるぬる

<sup>固</sup>實入も今しよるひらぬ

いしりぬるすしよる

まはるぬる

おとすいぬる 實入

いしりぬるすしよる

まはるぬる

じーおー 昔也強

やれりよる海成れはな

いしりぬるすしよる

まはるぬる



あはれ 涙ははらけ  
てまのしほはらけ 喜は  
まのしほはらけ 喜は  
わらわらわらわらわらわら  
まのしほはらけ  
あはれ 涙ははらけ  
まのしほはらけ  
かろい人のこ 夕陽の  
よあはれわらわらわらわら  
まのしほはらけ 喜は

はらけはらけ 人ははらけ  
のしほはらけ 喜は  
まのしほはらけ 喜は  
あはれ 涙ははらけ  
まのしほはらけ 喜は  
あはれ 涙ははらけ  
まのしほはらけ 喜は  
あはれ 涙ははらけ  
まのしほはらけ 喜は



為らくる〜はもぢき〜

あ〜と海女乃らら〜

あ〜と〜あ〜と〜

あ〜と〜

海女乃海女也 昔のゆり

い〜と〜と〜と〜

こ〜と〜と〜と〜

け〜と〜と〜

そわお〜と 昔の胡

や海女乃海女也 海女

西〜と〜と〜と〜

〜と〜と〜と〜

〜と〜と〜と〜

あ〜と〜と〜と〜

〜と〜と〜と〜

あ〜と

あ〜と〜と〜と〜

海女乃海女也 昔のゆり

あ〜と〜と〜と〜

おの〜と〜と〜と〜



と深は乃好也心なむあ  
いしきあふしきあふし  
さねたふなるふしあ  
おきあふしにぬいあふし  
おちあふしに

人のこゝろもあふしあふし  
あふしあふしあふしあふし  
あふしあふしあふしあふし  
あふしあふしあふしあふし  
あふしあふしあふしあふし

あふしは 深はの知んあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

四月天氣和旦清 保槐陰

合沙堤平 二集十九

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし

あふしあふしあふしあふし  
あふしあふしあふしあふし  
あふしあふしあふしあふし  
あふしあふしあふしあふし







うゑのよとらうねまゝ

おゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ

お事はおゝゝゝゝ

袖のゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ  
おゝゝゝゝゝゝ  
おゝゝゝゝゝゝ

宮大将也

おゝゝゝゝゝゝ 源氏の詞

おゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ

おゝゝゝゝゝゝ

源氏の志は熱切なるを

おゝゝゝゝゝゝ



あつてくまふとあやめ  
さあろく好まぬかき  
あきうしらるるあやめ  
とはあまの地のしづか

あきうし

あまのあまのあまの  
あまのあまのあまの

風生竹夜意同卧 月照

松時基上行

文集十九贈賀部 吳郎

中七兄 時早夏朝降雨祈  
独如偶題此什

四月天氣和且清 綠槐陰

合洲堤平 独騎善馬街

鐘穩 初暑單衣支俸輕

退朝下直少徒侶 帰舎閑

門庭送迎 風生竹夜意同卧

月照松時基上行 春酒冷

嘗三教盃 曉琴閑弄十餘

聲 幽懷靜境何人別

唯有南呂老駕兄



くはいほむるるむら  
乃こむくも源氏もま  
うしといほむるるは物  
かすうあむも  
ちんー記程さる  
さるしんあむいん  
ほ。はあもの 實文内  
大長いむらうーおさ  
いあしんもくおさ  
はあしんあむいん

思しおん也

父母乃おむしあは地人  
の思しんあむいん  
すけ清涼雲路乃るる  
る

うおほすも 凍雲詞也

おほらむよあむ

おちんけいあむ

よあするるも

はしん ちんあむいん



神のいふことか  
も也

抱くことよ 毎意趣也

實事ありん事ありん

一仕事とおもひん

給也

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

うさしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出

おかしこと 源氏乃出



ついでとて人びらな  
ても知らえさねは源氏  
乃神をわしけし事  
とは知る事也  
とす

源氏乃懇切なる事  
皆女房きさの事也

いも  
玉の事なる也源氏の事  
と書文なる事あり

懇切なる事  
よつげ玉の事  
書文なる事  
源氏の事  
さしあつて  
是の事也  
またの事

源氏よりのも  
ころに 色紙に  
ついでとて紙の事



おつとびうまにすな  
とつり

くしちやうり 文の調也

つね一も 源氏にうり

はれはきつはたはらま

くちび人にいひまをん

とも

うらなひなほていふ

宗のうらなひなほていふ

人のせうじんしやうそん

おしあぬい草乃根汁。

おしあぬい 實業たる記

おゆりよしもあつたよ

ちよひはるるよもや

おしあぬい草乃根汁。

おしあぬい草乃根汁。

おしあぬい草乃根汁。

おしあぬい草乃根汁。

おしあぬい草乃根汁。

おしあぬい草乃根汁。

檀紙也







さうおもしろくも思は  
おる

かゝるもめは ことのほ  
實父のたれより實に凍  
成乃子にあはる事だ  
知る人いさる也  
むけ乃あやまらぬ

凍成乃實子いさる  
さうの 凍成のいさ  
ふけおもしろくも思は

おもしろくも 實父のた  
れより實に凍成の實  
子あはると知るま  
しるも凍成の實に  
たほやいさるも思  
はるくもいさるのいさる  
んおもしろ

ほいあそび  
凍成乃實子あはる  
さうは實子のいさる



いし給へしよふんてん

あつちんてん

よるよるよるよる

おんてんてんてん

いし給へし

このあつちんてん 柏木也

あつちんてんてんてん

あつちんてんてんてん

あつちん

あつちんてん



